『人文学報』第117号（2021年５月）
（京都大学人文科学研究所）

［書　評］

白い石を流れくだる幾条もの水脈のこと

松　田　法　子〔建築史・都市史・領域史〕
（京都府立大学大学院 生命環境科学研究科）

二冊の本

1946年度生まれのこどもたちが小学校３年生の時に始められた郷土調査・研究と綴方（及び版画）の何度もの往還，かのじょ／かれらが卒業を目前にする1959年３月にそれらが『北白川こども風土記』として刊行されるに至った経緯は，『学校で地域を紡ぐ ―― 北白川こども風土記から ――』（以下『学校で地域を紡ぐ』）の菊地論考がじつに的確にまとめている（同書序章「学校で地域を紡ぐ ―― 北白川から，さらにいくつもの〈こども風土記〉へ」）。この郷土研究を発案し，こどもたちの放課後調査と綴方（版画も）の全面的指導にあたったのは大山徳夫教諭であった。かれの動機（郷土教育をするにあたってその材料がなく，素材を集める必要があったこと）やスタンス（その教育素材を教師が与えるのではなく，こどもたち自身が獲得していくことの意味を，戦後の初期社会科教育における「民主教育」の目標とともに進めた）については，石神論考「戦後社会科教育と考古学」が明快に押さえている。鳥羽耕史『1950年代 ――「記録」の時代』（河出書房新社，2010）の謂いを借りれば，「記録の時代」かつ「運動の時代」としての1950年代に全国で噴出した文化・社会運動のうねりと，北白川小学校での試みとの共時性が伝わってくる。そしてこの熱情の時代ののちにおける各地の「こども風土記」のゆくえと特色，また数量的充実は福島論考「敗北のこども風土記」などが見わたし，また『北白川こども風土記』の綴方におけるこどもたちの語りの構造そのものを高木論考「評言からみえるもの」が，版画の意味を佐藤論考「綴ることと彫ること」が解読した。

さてこの小文では，きわめて不十分なものに留まるが『学校で地域を紡ぐ』が対象とした『北白川こども風土記』の基盤となる空間の性格を手短に確認し，また筆者が個人的に関心をひかれた「花うり族」周辺の話題などを簡単にたどった上で，『北白川こども風土記』の底を流れる時間の地層に寄せて，これら二冊の本を拝読した若干の感想を記すようにしたい。しかし間違いや早合点があるかもしれないので，大方のご指摘を願う。

白川村の土地と北白川学区の土地

まず『北白川こども風土記』の基盤をなす社会と空間の構成をざっと眺めてみたい。「北白川学区」という名と区分による人の居住地は，従来田畑だった土地を区画整理して成立した，おおむね昭和初期以降の住宅地と，東山の裾野にある旧集落の複合体になる。区画整理後の宅地とは主に旧集落住民たちの所有地・耕作地だったとすれば，土地の基盤はまず旧集落＝白川村の社会と空間に由来しよう。

白川村は，白川が東山から流れ出す谷の山裾に横長く伸びる街村で，家々は白川街道

（別名山中越，志賀越道，今道越，琵琶街道）に沿って立地した。この街道は御所の東南，荒神橋あたりを起点／終点に（今道の下口），北東に延びて白川の地を抜け，白川が削り開いた東山の谷筋を通い道に京都と近江を結ぶ。遅くとも 14 世紀には白川集落の原型があり，室町時代には白河鉾をもって祇園御霊会に加わっている。近世の村は庄屋 2 名，年寄 4 名，頭百姓若干名により運営された[1]。明治 22 年測量の 1 万分 1 仮製地形図によると，白川村の長細い集落以外の学区範囲は田地で，集落の少し西に後二条院天皇陵（福塚）と知恩寺（百万遍）があり，集落の北西に池がある。ひとつの街村と農地からなる北白川学区のこのような土地の構成は，大正 10 年の地図上でも変わらない。その変貌は，区画整理が行き渡ってさらに住宅が増え始めるのを待つ必要がある。昭和 10 年及び 28 年の 1 万分 1 改測図（建物を示す塗りつぶしの濃い範囲が昭和 10 年時点の市街地で，薄い範囲が同 28 年）では，白川村の家並みの西 4 分の 1 ほどのところを白川通が南北に突き抜け，この「十二間道路」を軸にして学区内の全土にはグリッド状の街区が完成し，昭和 10 年以降 28 年にかけてそこへモザイク状に住宅が広がったことがわかる[2]。京都市の市街地は大正から昭和初期にかけてまず鴨川西部，そのご下鴨から東大路の間で北進し（大正元年，11 年，昭和 4 年，10 年都市計画図などより），今出川通の市電が銀閣寺道と河原町の間に開通したのは昭和初期のことである。一応ここで北白川学区の周辺にも目を広げておくと，大正 10 年から戦後まもなくまでに次のような変化もあったわけだ。すなわち北白川通だけでなく，東大路や今出川通も貫通した。北白川学区の西にある田中村など周辺村の土地でも区画整理が行われ，かつての田畑を人家が埋めつつある。京大構内の校舎も増えた。ちなみに以上に眺めた地図はすべて『北白川こども風土記』[3] の巻末に収録されてもいる。また同書所収の折れ線グラフ「北白川区内の人口及び戸数のうつりかわり」などによれば，明治 41 年に 357 軒 1792 人だった人口は大正末には約 700 戸 4000 人，戦時中にも純増して昭和 16 年に約 1400 戸 1 万人，30 年には 2400 戸弱で 1 万 3 千人に届こうとしている。こうした推移のうち明治 41 年以降の増加分はほぼすべて新興住宅地の人口増といえるだろう。

梅棹忠夫は北白川学区における人びとの複合状況を「花うり族」と「大学族」といったそうだが，むろん当時の住民がこの二類型に集約できるとは限らない。例えば小倉町は京都市北部で行われたさまざまな区画整理事業と比べて特に大きな地割が特徴で，南禅寺界隈に次ぐ高級住宅地イメージを形成し，K.N. や K.T. など戦後破格の人気を誇った大映画スターも屋敷を構えたと聞く。してまた戦後に京大関係者（教員）のこどもが特に多かったのは下鴨の葵学区だというのも時々聞く話ではある（戦前のことだが，『学校で地域を紡ぐ』黒岩論考 p. 236 には，昭和初期に北白川小学校へこどもを通わせていた「大学人」はわずか 3 人ほどだったとの回顧も掲載されている）。『北白川こども風土記』p. 313 所収「北白川校保護者職業調」（昭和 32 年 10 月，1138 人対象）によれば，このデータの範囲の保護者でもっとも多い職業は会社員で 400 人強，次が教師・教授で 120 人超，3 番目が公務員で 100 人超，次いで販売業（店舗），技能工（職人），重役・支配人，自由業，製造業，医師などである。先の人口増加状況からすれば当時学区内の「花うり族」（旧白川村住民層）は学区人口の 1 割強程度と考えられる。そして『北白川こども風土記』の巻末近くに収録される，「三年間を通して，北白川郷土の研究に協力してくれた六年生のお友だち」という書き上げには，朝鮮系や中国系の名のこども，カタカナ書きの名のこどももいる。学区のこのような戦後において共有されうる民主的社会化教育の素材として，北白川に「郷土」の「歴史」がさぐられた，という可能性も，知っておきたいと思うところではある。なお同書を成立させた

張本人である北白川小学校教員の大山徳夫は奄美の出身で，版元となった山口書店（本社北白川瀬ノ内町，東京出張所神田小川町）の山口繁太郎は青森出身ということもおもしろい。こうした「入り人」が，戦後社会科教育として志されたこどもたちの郷土研究と綴方を遂行し，かつそれを評価の盛り上がりとともに『北白川こども風土記』という一冊の本へ結実させていったというのだ。

ところで「花うり」は白川村における女性の仕事なので，梅棹の「花うり族」は比喩とはいえこれをそのまま受け取ると白川村の男性の仕事を欠くイメージを構成してしまうかもしれない。同村男性の主な生業は白川石に関わる各種石屋業だった。『雍州府志』（1682-1686）には上粟田北白川の山中はことごとく白石で村人は農閑に石工をするとあり，また明治 44 年『京都府愛宕郡村志』は，白川村では石工と水車業を主体にしていて農業や商業は内職の感があると記す。戦前の北白川小学校では石の種類や加工法など石に関わる授業が少なからず行われていたという聞き取りも興味深い[4]。

郷土の歴史の戦後 ―― 変貌・断層・再表象

歴史時代以降における北白川の生活史を色濃く伝える綴方は，『北白川こども風土記』の特に「六，郷土の産業と風俗」に集まっていて，それら 12 編のタイトルは掲載順に次のようである。「白川女の花売り」「白川女の花祭」「湖から盆地へ ―― 北白川の地形 ――」「白川の流れにそって」「北白川を流れる疏水」「農村だった白川村」「白川石と石屋さん」「水車の時代はもうこない」「昔から伝わっている産業 ―― ぼくらの見学記 ――」「家と屋号について」「鉄仙おどりと白川女おんど」「おばあさんたちの話 ―― 北白川の風俗習慣 ――」。

また白川の流れに沿って生まれた交通を，「白川街道を歩いて」（「三，郷土の史跡」所収）が描く。

これらのうち，『学校で地域を紡ぐ』に再録されている綴方は前掲藤岡の「湖から盆地へ」と，大槻雅子「白川石と石屋さん」，そして「白川街道を歩いて」（織田俠一・村田裕・高橋和子の分担執筆）である。

なお『北白川こども風土記』の最終章「八，その他」はおとなが編集した資料集になっていて，「北白川の昔と今」という概説と，「北白川の地形地質」や「白川村の産業」など 20 項目からなる「資料篇」がこどもたちの綴方の背景と情報を裏付けてくれる[5]。

『北白川こども風土記』の「六，郷土の産業と風俗」に並ぶこどもたちの綴方を読んでしかしすぐに気がつくのは，そこに描かれる“郷土の産業と風俗”の，否定しがたい変貌についてである。「水車の時代はもうこない」はそれを実に直截にあらわした表題であって，同様に「農村だった白川村」も，かつての土地のありようがタイトルになっている。

巻末資料篇にある「白川村の産業」は，明治 41 年調べの統計記録で，物産，民業，牧畜，工作場について概説されている（その出典は記載されていないが，明治 44 年『京都府愛宕郡村志』所収情報と同じ）。ややもすれば歴史の連続性が幻視されがちな京都だが，戦後の北白川学区においてこの明治末年の統計は既に近過去の歴史的地域像になっていただろう。

大槻雅子さんの「白川石と石屋さん」では，「白川の石屋さんが一ばんよくはんじょうした頃は，今から五～六十年前の明治三十年から四十年ぐらいの間でした」という。その頃の白川では共和組という組合が組織され，200 人もの男性が石屋仕事で暮らしていた。石屋は山で石切をする「山方」と，家（集落）で細工をする「石工」にわかれていたという。石切場は将軍山の清沢口と，白川街道を東山にあがっていった北側の白糸の滝，その先にある石部谷，身代わり不動から比叡山に登る山中町付近の蓬谷などにあった。しかしこの綴方が書かれたとき，「白川にいて石屋さんをしている家は，四～五軒くらいしか」なく，

いっぽうでまちなかに店を構えて石屋を続けるか，まちの石屋に雇われている人が50～60人はいるとも述べられる[6]。この報告を書いた大槻さんは，祖父と父の兄二人が石屋をしているなど石屋仕事を「代々うけついでいる家」のこどもである。明治後期から末期に白川の石屋業が盛んだった背景には，日銀京都支店や京都府庁，京都市役所などの建築に白川の石屋が多数参加したことも挙げられている。そして同時に注目されるのは，「しかし，その頃になると，建築のために使う石は，白川石を使わず，瀬戸内海の島々から買い入れて，それでつくるようになってい」たという変化である（灯籠や細工向けの石材としてはまだ白川石が使われていた）。そして大槻さんは，白川で石屋がすたれた理由をまず三つ挙げる。一つは庭石や灯籠（＝動産）の所有者にかかる税金。二つ目は鉄筋コンクリート建築への移行。三つ目は「今のように学問が進んでくると，石屋仕事を嫌がって，会社につとめる人がだんだん多くなってきたため」。明治後期には白川石の利用範囲や頻度が低下していたほか，山から切り出してくる手間負担も見合わなくなったとも述べられる。

元禄期に始められたと伝わる白川の水車の興亡は，白川石のそれと時期的に似ている。白川沿いの水車業は（京都と近江の境を示す）重石と白川集落のあいだになる谷筋，地蔵谷（琵琶町）に立ち並んでいた。中川洋子さん「水車の時代はもうこない」は，この水車業は江戸中期から発達して明治30～40年頃までが盛んだったといい，従来の精米や製粉に加えて明治以降は伸銅が増えたことを伝える。そのご水車が廃れたのは，田辺朔郎の琵琶湖疎水竣工によって次第に電力利用が広まったからだという。

これら男性が担った地域産業の後退に対して，白川女の花売りのほうは昭和30年代前半にも健在だった。西村紀久子さん「白川女の花売り」によれば，「白川女の服装をしているねえさんやおばさんたちのすがたは，花売りなどに出かける時にいつも見かけ」られる。しかし花売りの形態や売られる花は，既に大きく変わってもいる。西村さんが聞き取りをしたおばあさんたちが「若いころ」には，白川の花畑でつくられた花と，野山でとったウの花，オミナエシ，キキョウ，ヤマブキ，オシボ草などが売られていた。しかし聞き取りの時点で白川女が売る花のほとんどは，奈良・伊勢・大阪などから買い入れられ，白川女は白川の花市で花を仕入れて売りに行く形態になっていた[7]。なおそもそも白川女における花の「売り」とは（平安時代から御所に花を納めたという伝承的前史のうえで）近世に成立したとされるが，それは明治時代いっそう盛んになったもので，西村さんによると「これまで花売りをしていなかった白川女たちも，むすめさんからおばあさんまで花売りをするように」なった。そして「そうなると，今までのように，頭にのせて売っているだけではたりなくなり，大正の初めごろからは，車に花を積んで売りに行くようになりました」。徒歩で車を引いた販売先ないし得意先の範囲は，西は西大路，南は十条から伏見あたりに至るという。そして白川女の花売りがますます盛んになったのは，戦時中に「花の組合」が結成されてからであった。

白川女の花売りをいっそう盛んにした「花の組合」の組合長とは，この綴方でこどもたちに白川女の服装や歴史を詳しく説明している内田福太郎その人で，さらに内田は「白川女風俗保存会」の会長でもある。1963年に保存会結成15年を記念して北白川天神宮に建てられた石碑の碑文も内田の書だ。その5年後より時代祭の行列に白川女が加わった（『学校で地域を紡ぐ』p. 230より）。

戦後に白川女の風俗が演出されていく様子も，こどもたちの記録のうちにみることができる。西村さんの綴方の最後は，内田福太郎の話を聞きながら見せてもらったという「去年の秋，東京の三越デパートに」白川女が招かれて，「デパートの売り場の前で，多くの

見物人にとりまかれて写された写真」の天然色の幻燈のことであり，続く宝里富美子さんの「白川女の花祭」は，昭和 23 年頃から内田が始めたという花祭についてである。その経費は花の組合だけでなく，府や市，観光連盟からも供出されており，その他大半は寄付だった。白川女の花祭の行列には，「チューリップ・三色スミレ・ヒヤシンス・スイセンなどそのほか，時季はずれのいろいろな花をたくさん」持った小さなこどもたちも動員されていた。奥村雅子さん「鉄仙おどりと白川女おんど」によれば「白川女おんど」がつくられたのは昭和 33 年のことで，その創始者もやはり内田である。内田福太郎は例えば京都の販女や芸妓・舞妓・太夫などの服飾と風俗をルポルタージュした京都新聞社編『京の女人風俗』（河出書房新社，1963）でも，白川女の装束や風俗を解説している。奥村さんの綴方によると，内田氏は白川に伝わる鉄仙おどり（創始不詳だが近世と考えられている）の継承にも熱心だったらしい。そして奥村さんは，「なぜかおばあさんたちは一人もおどっておられませんでした」という白川女おんどと，「若い人は誰もおどっていませんでした」という鉄仙おどりの両方の輪に，おどりをまねて加わりもした。

京都近郊村落における戦後的変容の風景について，筆者（松田）はかつて北山杉丸太の産地である中川村でそれを実感したことがある。京都北山の風景とはまず，北山杉の特徴的な林の姿によってもっともよくイメージされ，それは例えば東山魁夷の絵画作品や川端康成の『古都』が描き出す。『古都』は 1961 年 10 月から翌 62 年 1 月にかけて朝日新聞に連載され，その最終章から題がとられた東山魁夷の「冬の花」は，1962 年に魁夷から入院中の川端へ贈られて書籍版『古都』の口絵にも採用されることになった。この文学作品はすぐさま松竹によって映画化され，室町呉服屋の娘と中川村の娘という生き別れになった双子を岩下志麻が一人二役で主演し 1963 年 1 月に封切られ，同年アカデミー賞の外国語映画部門にもノミネートされた（受賞はフェデリコ・フェリーニの 8 1/2）。樹冠にだけ円錐形に葉を残し，細い幹がすっと伸びる北山杉の典型的な林の姿はスタジオセットでも再現され，撮影された。こうした作品で視覚化されたような北山杉がびっしり植わる北山の景観とはしかし，筆者らの調べによると明治中期にはほぼ全く存在せず，大正頃から始まった植林の結果戦後初めて姿をあらわしたランドスケープであった。その背景には，東京を含め大都市圏への販路の拡大や戦後復興期における需要の急拡大がある。従来各戸の屋敷まわりの斜面か谷筋のみに育成されていた杉は，とくに戦後になって北山の山じゅうを覆う植生景観になったのだった。なお北山杉丸太はもともと，中河女（中郷女）とよばれる村の女性たちが 3 本ほどを頭に載せて，「京道」という尾根道を鷹峯まで運ぶ。白川女や大原女が近世以来あまたの絵画で題材になったのに対して，中川女がそのような対象になることは基本的にない。そして映画『古都』でタチカケ姿の中川女たちは，小さな刃物で丸太の杉皮を削ぎ落とす「こむき」とよばれる作業にいそしみ，また実際その頃の丸太運搬はトラックに変わってもいた。

北白川の源流をさがす

白川の源流ってもんがはっきりせんのですよ。だからそれを探しに行くというわけ。

というのが，藤岡の説明だったと思う。

綴方を書いた「こども」の一人だった藤岡換太郎は地球科学者になり，綴方を出してから 60 年を経て，北白川学区から白川の川筋を追って本格的に歩いた。藤岡によれば，その綴方は「当時京大の地理の教授であった父親から聞いた話をほぼそのまま文章にしたもので，実際に自分で現地を歩いて地形や扇状地の解析を行って確かめたわけではない」ことが気になっていた。内容的にもそれを更新したいと考えていたという（『学校で地域を紡

ぐ』p. 379-380)。藤岡は『学校で地域を紡ぐ』「新編 湖から盆地へ ―― 北白川の地形と風土 その成り立ちと変遷 ――」の冒頭で，こう書いている。「改めて故郷を眺めて見ると，北白川の文化や文明がすべて白川に依存していることが分かった」。そして同じ記事をこう締めくくる。「『北白川こども風土記』の基盤は白川の流れにある。（中略）北白川の人びとの生活は，白川抜きには語れない。白川の集落，産業，文化のすべてが白川の営みによって賄われてきた。そのことが『北白川こども風土記』に書かれているのであった」。区画整理以前の居住と生業の構造を，白川がつくったというわけだ。かつまた白川の扇状地がつくった水はけのよい高燥地が，戦後京都において格別の人気住宅地の下地を準備した面もあるのかもしれない。

たまたま，藤岡の白川歩きに同行したことがある。2017 年秋のことだったから，ちょうど藤岡のそんな再確認作業の途中だったのだろう。北白川別当町でそれなりの人数が集合して（『学校で地域を紡ぐ』の編者菊地氏や，関西旅行中の早稲田大学建築研究室のグループも一緒だった）御影通りでバスを待ち，北白川の流れを横目に下鴨大津線の坂道を揺られて登っていく。山中町のバス停で車を降り，山中集落から先は南北二手に分かれる川の，北の流れを選んで上流をたどる。源流とは河口から最も離れた水源地（帯）のことで，北白川は祇園の白川筋を最後に鴨川へ吐き出されると考えるなら，南北二手に分かれた水流の，より河口から遠いだろうという山中町の山の中へまずは源流地を探しにいったのだ[8]。

経路上，砂防ダムの中を通過する。溜まっているのは白っぽい褐色の砂だ。そこを網目のように細く流れる水。水による砂の削られ方をしばし眺めながら，川ができる，ということの基本原理を藤岡に解説してもらう。ちょろちょろと流れて砂を崩しているその水流が，意識の中で砂漠の大河に変わる。

砂防ダムを通り抜けると草の背たけがぐっと高まり，最後は藪を漕ぐことになった。鎌がない装備ではそれ以上進めない。その日わたしたちが断念したあたりにはしかし，まだしゃんときれいな弁財天の灯籠が草っ原から姿をのぞかせていた。そう遠くない過去のある時期まで，この源流地にはじゅうぶん人通りもあったのだろうか。

それから一同は踵を返し，白川の流れに沿って徒歩で下鴨大津線を下った。おおむね白川街道を拡幅した車道である。河床の花崗岩の露頭を上からのぞき込み，民家や小さな社の前へ立ち止まり，水車の話を聞いたりしつつ歩く。重石はその終盤，車道から川沿いの湿った土道に降りた位置にあった。じっくりと苔むして，すばらしい存在感。日も暮れたころ，白川の「河口」に着いた。ある川の終わりの地点と考えて鴨川を眺めるのはあたらしい体験。

さて白川の上流から北白川学区内までの川沿い歩きで一貫して記憶に残ったのは，川底というよりも今は石造物や小さな境内などの砂がつくり出す，どこか白っぽい風景だった。褐色がかった白が柔らかく雨に濡れながら，いつも何がしか視界に入ってくる行程。河床の白川砂は『北白川こども風土記』の頃には既に取り尽くされ，山を削って採取されていた（同書 p. 245)。山砂の採取も山崩れの原因になるので禁止された（滋賀側でより遅くまで採掘していた）と聞いたこともあるように思う。

歴史という時差

さてやや唐突だがここでふいに考えてみたくなるのは，「時差」の統合法についてである。この考えのまとまりはまだとくについていない。しかし，聞くこと，語ること，描かれること，あらわされること，そして歩くこと，などの中に，常に生起し，更新されていく，その時差のことである。例えばこどもたちの聞き取りには，こどもが生きているその時間に対して，おとながじぶんたちの過去について語ることの時差があり，またその語り

にはおとなも直接経験していない過去も含まれる。伝えたいという意思を伴う過去もあるし，伴わない過去もある。こどもやおとなや先生が一堂に会した語りの場に浮遊するかずかずの言葉はその場にいる人たちそれぞれに何らかの近さや遠さをともなって受け取られ，あるいは取り損なわれる。あるものは原稿用紙に定着され，またあるものはいったん退却する。過去に生起した事がらの何ものかがそのときに生き延びる。

聞くこと／聞かれること，語ること／語られること，描くこと／描かれること，歩くこと／歩かれること，あらわすこと／あらわされることにおいて，過去は不断に呼び起こされる。過去には新しい何かが吹き込まれ，何らかの歴史がそこに立ち上がる。こどもたちの綴方や，その読み取りを試みるテキストの行間には，いつも複数種の時差が含まれる。そうした時差を記述としてどのように統合しうるのかということがふと頭にのぼった。答えはまだない。そこにおいて，例えば60年を経て綴方の「こども」じしんによってたどられた白川沿いの，ゆるやかにひらかれた歩行を興味深く思う。

むすびにかえて

白川村は白川街道に沿う街村だった。白川女といわれた花売りの女性たち（ふだんは農業も担う），白川石を扱う石屋たち，かのじょかれらのこどもたちは，おおむねそこに住んでいた。その道は京都と近江を隔てる東山のつらなりができるだけ低くなる地点をたどる。それは延暦寺表参道の宗教都市かつ琵琶湖のみなとまちである坂本や，またその先の北国と京の都を結ぶ山中越である。ここが低い谷になったのは，まわりに比べて削れやすい地質だったからだ。白川の谷は白亜紀後期の花崗岩。その南北の比叡山と大文字はホルンフェルス，つまり先立つ中世代のチャートと砂岩の混在岩が，貫入してきたマグマ（花崗岩）の高温と高圧によってより堅く変化した地質である。花崗岩質の山を流れる水は次第に花崗岩地帯のほうの表面を侵食し，大量の真砂土に変えた。その真砂が白川砂だ。真砂土は水で流されて扇状地をつくり，谷はいっそう低く開かれ，そこは人の通い道になった。白い砂は都市京都の建築・庭園文化にひもづき，そこに欠かせないマテリアルとなる。加工しやすい白川石は灯籠などに姿を変えて都市空間の中へ旅立った。花は水はけよく伏流水のある扇状地上で育ち，摘み取られた。白川女がそれらを徒歩で売り回るのは本来，販売先である京のまちとこの村との近さゆえでもある。まちとの適度な距離感は，区画整理後の北白川学区の性格にもかなり影響したはずだ。高燥な扇状地の地面を作ったのも白川の流れと真砂。この土地の風土の基本条件には根底的に，白っぽい花崗岩の存在が関わる。北白川の地に生起する人間界のことがらの底あるいは山の中には，じっと白い石がひそむ。そこをいつもちろちろと，あるいははやあしで，水が流れ下る。地表や地下を運動する何筋もの，不定形な網目として。

語られること，記録されること，読まれること，すべての人文的行為の底には実は地球史的な時間がいつも横たわっているが，それは歩くことによって，もっともよく捉えられる。そのみちのりにはいろいろな時差が埋め込まれている。そこに感覚をすませてみたいと思うとき，『北白川こども風土記』と『学校で地域を紡ぐ』という2冊の本は，そのための奏楽をすでに幾重にもひびかせているだろう。

註

1）以上『日本歴史地名大系』京都府（1981年）・滋賀県（1983年），平凡社，「白川村」「山中村」「山中越」「坂本」などの項より。

2）『北白川こども風土記』では森健くんが北白川での区画整理事業を調べている（森健「北白川の発展 ―― 区画整理 ――」。これは大山教諭が，森くんの父が京都府庁で都市計画

を担当していることを知って依頼したテーマらしい。この綴方には巻末の「区画整理区分地」という地図が対応し（作図者の記名はない），学区内各地域の区画整理がいつどのような主体によって行われたかが一覧できる。同図によれば，白川通今出川交差点から別当町にかけての今出川通に面する学区南部は京都市の区画地で昭和13年7月から15年1月までの整備，その西から疎水までが小倉町の範囲で土地会社による大正後期から昭和初期の整備，別当町より北部になる北白川小学校を挟んで上終町までと東は瓜生山など東山の裾までの最も広い範囲が北白川組合による昭和9年7月から10年8月までの区画地，そこから疎水を挟んで養徳学区に隣接する学区西部が平井高原組合による同7年2月から8月までの区画地である。つまり区画整理工事の進行としては，小倉町，平井高原組合区画地，北白川組合区画地，京都市区画地の順になる。なお京都市区画地には旧村の延長軸である白川街道沿いの土地が含まれた。森くんの綴方に取り上げられているのはうち北白川組合区画地のことになる。それは市の助役で北白川に土地を持っていた鷲野米太郎の発言などを契機に昭和4年6月北白川土地区画整理組合がつくられ（組合長は会田竜雄），実行にあたっては市の役人や白川の協力者たちが各戸を説得してまわったという。既に「田中高原町」の区画整理が進行していたので，「北白川も負けてはならないという気持ちがみんなにあった」とも森くんは書いている。

3）　本稿で筆者が参照した『北白川こども風土記』は2刷（昭和34年7月5日発行／なお初版は同年3月1日発行）。

4）「白川は石屋が多かったんで，石屋にあうような勉強もやりましたな。たとえば，理科の勉強の中でも，だいたいは，石のしゅるいやせいしつや，その石のよしあしなどがよくわかるようなことをですな。それから，算じゅつでも石材の大きさなんかを計算してだしたり，そのほか，大事なもんは，石材の設計なんかうまくできるように教えられましたな」（『北白川こども風土記』p. 299より）などという具合である。同じ頃女子への主な授業は裁縫だったとも記憶されていた（同）。

5）　ちなみにここで「北白川の地形地質」を執筆している上治寅次郎は，六甲山の形成メカニズムについて定説を覆したり，有馬のラジウム鉱泉や熱海・箱根など各地の温泉と地質の関係を研究した地学者だ。

6）『北白川こども風土記』の平井陽くん「昔から伝わっている産業 ―― ぼくらの見学記 ――」は，京都には各地から輸送した石を売る石問屋が5軒あり，その石を仕入れて石屋業をする店80軒あまりがあって，そのおおかたは「白川出の人」だとも記している。

7）　平井くん「昔から伝わっている産業」によれば，この時点で北白川産出の花は，菊，金仙花，ダリヤ，くじゃく草，ゆりなど40～50種類もあり，しかし花畑が宅地に変わったり手入れが行き届かなかったりして生産量が足りないために，2/3以上の花は他地方から買い入れていると記される。

8）　なお例えば『日本歴史地名体系』では絵図から白川の川筋の変化を推測してこう述べている：「かつての白川は三条通の北を西に流れて鴨川と合流していたが，承応二年（一六五三）の新改洛陽並洛外之図によると白川本流が廃絶しており，それに代わって白川の支流であった小川（こかわ）が，新たに白川として登場している。従って現在，平安神宮（現左京区）前の慶流橋から疏水と分れて南へ流れ，知恩院古門前（現東山区）を西に流れて四条通の北で鴨川運河に合流する川も白川とよぶが，これは昔の小川であり，かつての白川本流ではない」。